

目次

一 蜻蛉日記の表現における波動性	1
(一) 大武国章の女「近江」との関係について	1
(二) 作者のいう「幸福なりし日」について	32
二 蜻蛉日記における方法と源泉	55
(一) 古今六帖との関連についての二、三の問題	55
(二) 和歌及び和歌と散文のかかわりについて	91
(三) 「心細し」の一語を借りて——その模倣と創造——	123
(四) 和歌と和歌的表現	136
(五) 古語の再生	149
(六) 漢詩文との関係について	168
(七) 伊勢物語・大和物語と蜻蛉日記	196
三 蜻蛉日記の周辺	211

(一) 仏教的周辺について 211

(二) 蜻蛉日記の風土 (上) 240

(1) 鳴滝般若寺趾 242

(2) 石山寺から鹿跳へ 251

(3) 宇治から木津へ 263

(4) 付論 288

(イ) 費野の池の所在について 288

(ロ) 何ばかり深くもあらず——比叡山日記 296

(ハ) 歌枕「末の松山」 300

(ニ) 鶯の声 306

(三) 蜻蛉日記の風土 (下) 311

(1) 歌枕「音無滝」 312

(2) 宇治の網代 315

(3) 巨椋入江 317

(4) 費野池 322

(5) 山の霧・川の霧——初瀬山・広幡中川—— 324

四 歌人道綱母 335

(一) 歌人道綱母——その評価の歴史を中心に 335

(二) 歌人道綱母再論 370

五 蜻蛉日記の構図 381

六 蜻蛉日記の出典探索一覧 395

凡例・目次

一、上巻の世界 401

二、中巻の世界 448

三、下巻の世界 489

あとがき 533

初句索引 539

一 蜻蛉日記の表現における波動性

(一) 大弐国章の女「近江」との関係について

一

『蜻蛉日記』は上・中・下三巻に分れており、全体の構成を客観的に見た場合、喜多義勇氏のごとく三部を執筆の順序に従って成長的に見る考え方^(注1)、荒木田楠千代氏から岡一男氏につづく序・破・急もしくは序分・正宗分・流通分と分ける見方^(注2)、あるいは菊田茂男氏のごとく主題に副った三部の美的世界にわかつというふう^(注3)に諸説があり、いずれも巻々に即しての分析が試みられているのであるが、いま、かりに三巻の日記全体を二つの部分に分けて見ることとする。

それは中巻の鳴滝籠りのくだりまでを境にして考えるわけであるが、その場合前半の大部分——天曆十年あたりから天禄二年中頃までの約十五年間——においては文脈に波動性が見られるが、後半にはそうしたものはなくなっ